

# ニッポン

ドクター和の



# 臨終圖卷

長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。か  
京医大卒業後、大阪大第兵二内科入局。1995年、二  
庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療を主とし  
ながら在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。  
近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベ  
ストセラー。関西国際大学客員教授。

して固く私の手を握つてくださいました。医学の奥深さを私に教え  
てくれた永遠の師が、巨樹が静かに倒れるようにして7月18日、天に召されました。105歳と9ヶ月の人生でした。

先生が、体調不良で入院し、口から食べられなくなったのは今年

3月のこと。主治医は先生に2つの質問をしたそうです。

①経管栄養や胃ろうをしますか  
②自宅に帰りますか

先生ははっきりと①には「やらない」と、②には「帰りたい」と答えたそうです。

そこから4カ月間、とても穏やかで平和な日々を

自宅で過ごされたそうです。最期は、家族の皆さんや主治医や看護師さんに向かって「ありがとうございます」と言葉を遺(のこ)して旅立つたと、告別式でご長男が話しておられました。

日野原先生の死因は「呼吸不全」となっていますが、私が主治医ならば「老衰」と書いていたはず。主治医の先生は、聖路加国際病院の院長ですから死因欄に何か病名をつけることが慣例なのかも知れません。しかし見事な老衰、見事な尊厳死でした。

何を隠そう、日本において一番はじめに終末期医療に尽力したのが日野原先生でした。その教えを胸に、私も創ることを忘れずに終末期医療に邁進し、余生など考えず、患者さんのために死ぬまで生きたいと思います。

「私には、余生などないよ。これからぞ」。これは聖路加国際病院名譽院長の日野原重明先生が、104歳のときに詠んだ俳句。先生は98歳で俳句を始め、104歳で句集『10月4日 104歳で104句』を出版しました。

その夏、私は聖路加国際病院に日野原先生を訪ねました。先生は、私が副理事を務める日本尊厳死協会の会員になっていたのです。そのとき、私がこんな話を聞いてくださいました。

「あなたはマルティン・ブーバーという人を知っていますか。人は創つていますか。



17 日野原重明

# 自ら示した尊厳死